

平成 23 年度

京都市立学校児童・生徒

新体力テスト結果報告書

平成 23 年度

全国体力・運動能力，運動習慣等調査結果（京都市の状況）

京 都 市 教 育 委 員 会

京都市立学校園体育研究会連盟

目 次

《共通資料》

ごあいさつ	1
はじめに	2
I 実施要項	3

《校種別資料》

II 調査結果の概要

1 平成23年度京都市立学校児童・生徒の体力・運動能力の現状について

(1) 小学校の現状	1
------------------	---

- 資料1 <京都市立学校児童・生徒の新体力テストの平均値の推移（平成22年度・23年度京都市平均値比較）>
- 2 <平成23年度京都市立学校児童・生徒の体格，新体力テストの平均値と平成22年度全国平均値との比較）>
- 3 <T・スコアーから見た平成22年度・23年度京都市平均値の比較（22年度を50とした場合）>
- 4 <T・スコアーから見た平成23年度京都市平均値と22年度全国平均値との比較（全国平均値を50とした場合）>

2 京都市立学校児童・生徒の過去10年間の体力・運動能力の推移	13
---------------------------------------	----

(1) 小学校の考察（2年生・5年生）	14
---------------------------	----

3 運動部活動所属による比較	20
----------------------	----

(1) 小学校6年生	21
------------------	----

4 今後の課題	23
---------------	----

II 調査結果の概要

1 平成23年度京都市立学校児童・生徒の体力・運動能力の現状について

(2) 中学校の現状	1
------------------	---

- 資料1 <京都市立学校児童・生徒の新体力テストの平均値の推移（平成22年度・23年度京都市平均値比較）>
- 2 <平成23年度京都市立学校児童・生徒の体格，新体力テストの平均値と平成22年度全国平均値との比較）>
- 3 <T・スコアーから見た平成22年度・23年度京都市平均値の比較（22年度を50とした場合）>
- 4 <T・スコアーから見た平成23年度京都市平均値と22年度全国平均値との比較（全国平均値を50とした場合）>

2 京都市立学校児童・生徒の過去10年間の体力・運動能力の推移	9
---------------------------------------	---

(2) 中学校の考察（2年生）	10
-----------------------	----

3 運動部活動所属による比較	13
----------------------	----

(2) 中学校3年生	14
------------------	----

4 今後の課題	16
---------------	----

II 調査結果の概要

1 平成23年度京都市立学校児童・生徒の体力・運動能力の現状について

(3) 高等学校の現状	1
-------------------	---

- 資料1 <京都市立学校児童・生徒の新体力テストの平均値の推移（平成22年度・23年度京都市平均値比較）>
- 2 <平成23年度京都市立学校児童・生徒の体格，新体力テストの平均値と平成22年度全国平均値との比較）>
- 3 <T・スコアーから見た平成22年度・23年度京都市平均値の比較（22年度を50とした場合）>
- 4 <T・スコアーから見た平成23年度京都市平均値と22年度全国平均値との比較（全国平均値を50とした場合）>

2 京都市立学校児童・生徒の過去10年間の体力・運動能力の推移	9
---------------------------------------	---

(3) 高等学校の考察（2年生）	10
------------------------	----

3 運動部活動所属による比較	13
----------------------	----

(3) 高等学校3年生	14
-------------------	----

4 今後の課題	16
---------------	----

ご あ い さ つ

平素は、児童・生徒の健全育成に向け、校長先生をはじめ教職員の皆様には熱意溢れる取組を推進いただき、心から感謝申し上げます。

昨年10月10日「体育の日」にあわせ、文部科学省から、22年度の体力・運動能力調査結果が公表されました。全国結果を概観しますと、児童・生徒の基礎的な運動能力は昭和60年頃のピーク時に比較して依然と低い結果を示していますが、近年は上向きに転じており改善傾向にあり、京都市におきましても、新体力テストが導入された平成11年度と比較してみると、多くの項目で数値が上回り、長期的な体力低下傾向から、少しずつですが、改善の様子が見受けられるようになってきました。しかし全国の平均値と比べると、ほとんどの種目で下回っており、以前から指摘されている「運動する子どもとしない子どもとの二極化」傾向も引き続き顕著に表れています。

23・24年度から小中学校で実施される新学習指導要領では、子どもたちが生涯に渡って豊かなスポーツライフを実現する資質を養うことを重視しています。運動が得意な子どもたちの能力を伸ばすことも重要ですが、そうでない子どもたちも運動の楽しさや喜びを味わい、自主的・自発的に運動に親しみ、子どもたち全体の体力向上を図らなければなりません。

「体力」は、人が健やかで充実した生活を送るための源です。学校での体育・スポーツ活動はそのきっかけ・入口となる重要なものと考えられます。

本書は各校で積極的に実施していただいた「新体力テスト」のデータを収集・分析し、蓄積された過去のデータや全国結果と比較し、グラフ化することにより、京都市の子どもたちの体力の現状や推移をわかりやすく解説したものです。各校におかれましては、本書を御活用いただき、指導の工夫を図っていただくとともに、子どもたちが体育の授業はもとより、日頃から運動に親しむ習慣を身に付けることができるよう、家庭・地域との連携の下、体力向上に向けた取組の一層の推進に努めていただきますようお願い致します。

最後になりましたが、本報告書の作成にあたり、校務御多忙の中、貴重な資料を御提供いただいた各校並びに調査結果を分析・考察いただいた京都市立学校園体育研究会連盟の調査委員の皆様には心から感謝申し上げます。

平成 24 年 3 月
京都市教育委員会体育健康教育室
室 長 山 本 雅 之

はじめに

現在の「新体力テスト」は昭和45年度から実施されている「スポーツテスト」の種目の見直しが図られ、平成11年度から開始されたものです。京都市立学校園体育研究会連盟では各校において積極的に実施していただいた「新体力テスト」の結果を集約し、子どもの体力づくりの取組や体育・スポーツ活動の指導に広く活用されることを目的に、集計・分析・考察したものを報告書として作成しています。

平成14年9月に中央教育審議会から出された「子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申）」には、「体力」は身体的なことはもちろん、精神面の充実に大きく関わっていることや、子どもの体力の低下が招く社会への悪影響などが記載されています。「学力」同様、「体力」についても子どもにとって大切な「生きる力」を支える大切な柱のひとつであり、子どもたちがたくましい心と体が備わった人間として社会に出ることは、社会全体の活力へとつながるものと考えられます。

昨年、文部科学省は現在の子どもの体力として「下げ止まりから改善へ向かっている」と発表しました。子どもの体力低下が問題視され、各方面で様々な体力向上の取組がなされた結果と捉えることができますが、一方で「ピーク時（昭和60年）と比べると依然として低水準」ともコメントされています。京都市も全国と同じ傾向にあり、これからも引き続き子どもの体力向上に向かって粘り強く取り組む必要があります。

本年度の報告書では、考察内容について、新体力テストの各種目がどのような体力要素と関わっているのか、またその要素を伸ばすにはどのような運動をすればいいのか等、具体的な例を示しながら記載しました。つきましては、本報告書を十分にご活用いただき、教科の時間はもとより特別活動や運動部活動など、また、家庭や地域との連携を図る中、子どもの体力向上に関する取組の一助にしたいと願っております。

最後になりましたが、本報告書を作成するにあたり、貴重な資料を提供していただきました各校並びに資料の分析・考察にあたっていただきました新体力テスト調査委員会の皆様に厚くお礼申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

平成24年3月
京都市立学校園体育研究会連盟
会長 井上 義信

I 実施要項

1 目的

新体力テストを実施することにより、京都市立小・中・高等学校児童生徒の体力・運動能力の状況を明らかにし、日々の体育指導上の基礎資料とする。

2 調査対象

- 小学校：1～6年（6～11歳）の男女児童
- 中学校：1～3年（12～14歳）の男女生徒
- 高等学校（全日制）：1～3年（15～17歳）の男女生徒

3 調査期間

平成23年4月～7月

4 調査内容

(1) 体格

平成23年度定期健康診断の発育測定による身長・体重・座高

(2) 体力・運動能力

小学校児童は「新体力テスト実施要項（6～11歳対象）」、中・高等学校生徒は「新体力テスト実施要項（12～19歳対象）」による。

<新体力テストの種目等一覧>

実施した検査種目と体力・運動能力要素との概ねの関係を以下のように示すので、各校児童・生徒の体力・運動能力把握の際に参考にされたい。

種目	主な体力・運動能力要素	対象	
		小学校	中・高等学校
握力	筋力	○	○
上体起こし	筋力・筋持久力	○	○
長座体前屈	調整力 (平衡性, 敏捷性, 巧緻性, 柔軟性)	○	○
反復横とび		○	○
20mシャトルラン	全身持久力	○	○
持久走		—	
50m走	走力	○	○
立ち幅とび	瞬発力	○	○
ソフトボール投げ	投力	○	—
ハンドボール投げ	投力	—	○

※ 「○」…実施種目, 「—」…実施しない種目

※ 中・高等学校においては、20mシャトルランか持久走のどちらかを学校選択で実施する。

5 平成23年度新体力テスト調査人員

校種	校数	学年別		調査人員	小計	合計
小学校	173校	1年	男	1,075	2,073	24,654名
			女	998		
		2年	男	1,018	2,128	
			女	1,110		
		3年	男	1,376	2,637	
			女	1,261		
		4年	男	1,649	3,233	
			女	1,584		
		5年	男	5,280	10,210	
			女	4,930		
		6年	男	2,234	4,373	
			女	2,139		
中学校	68校	1年	男	1,538	3,081	11,084名
			女	1,543		
		2年	男	2,633	5,113	
			女	2,480		
		3年	男	1,472	2,890	
			女	1,418		
高等学校 (全日制)	3校	1年	男	198	335	1,239名
			女	137		
		2年	男	359	502	
			女	143		
		3年	男	248	402	
			女	154		
総合計						36,977名

6 集 計

○すべての統計処理は、体育健康教育室で行う。

○報告書中の全国平均値は、「平成22年度体力・運動能力調査報告書(文部科学省スポーツ・青少年局)」による。

☆参 考:統計用語の解説☆

1 平均値

集団の傾向を表す数値の一つで、計算しやすい、わかりやすい、一般に最もよく知られている等の理由からよく用いられ、集団の特徴を最もよく表す数値である。しかし、ほぼ同じ能力が集まっている場合でも、優れている者・劣っている者の差が大きい集団の場合でも同じ数値になる場合があり、平均値だけで集団の傾向を判断する場合には注意を要する必要がある。

2 標準偏差

前述のように、平均値が同じ場合でも、数値が比較的そろっている場合もあればバラバラになっている場合もある。このような測定値の散らばり具合を示す代表的なものが標準偏差である。

標準偏差は次のような性質をもっている。

- ①標準偏差が大きければその集団には能力の低い者から高い者までいろいろな者が含まれている。
- ②標準偏差が小さければ測定値の散らばりが少なく、平均値を中心とした能力が比較的そろっている者が多い。
- ③標準偏差はT・スコアの計算や測定値を得点化するときの単位としてよく用いられる。

3 T・スコア

スポーツテストによって得られた測定値は、時間・回数・距離など、それぞれ異なった単位をもっている。したがって、このような異なる単位をもった数値はそのまま直接比較することはできないし、年齢が異なれば平均値や標準偏差も違ってくる。そういった単位や年齢その他のことが異なっても具体的な数値で比較できるものとしてよく用いられるのがT・スコアである。

T・スコアは次のような性質をもっている。

- ①「50」を中心におよそ「20～80」の範囲に分布する。
- ②「50」が集団の中でどのような位置にあるかがわかる。
- ③種目や年齢・性別だけでなく、他種目などのT・スコアとも同じように扱い比較することができる。

なお、T・スコアは、平均値と標準偏差がわかっているならば、次の公式にあてはめることによって簡単に計算できる。

$$T\cdotスコア = \frac{10 \times (\text{個人の測定値} - \text{平均値})}{\text{標準偏差}} + 50$$

1 本報告書における「T・スコア」について

Tスコアについては、本報告書「Ⅱ 調査結果の概要」の「1 平成23年度京都市立学校児童・生徒の体力・運動能力の現状」(p 7～22)において、23年度京都市平均値と「22年度京都市平均値」及び「22年度全国平均値」との比較・分析に用いている。上述の3つの平均値のT・スコアを基に、「レーダーチャート図」を作成している。

2 「レーダーチャート図」について

① 22年度・23年度京都市平均値との比較

「22年度京都市平均値=50」として点線で表し、それに対する「23年度京都市平均値」を指数として実線で表し、比較。

② 22年度全国平均値・23年度京都市平均値との比較

「22年度全国平均値=50」として点線で表し、それに対する「23年度京都市平均値」を指数として実線で表し、比較。

4 5段階得点

各測定値を段階別に得点化する場合、最もよく用いられるのがこの5段階評価である。5段階に区切る場合、平均値と標準値を用いる。5段階区分の仕方と各段階の割合を図示すると次のようになる。

5段階区分の仕方と各段階の割合

